試験制度が中学生の学力に及ぼす影響に関する研究*

明治学院大学

神 保 信 一

I 問 題

神奈川県においては、公立の高等学校入学者の選抜について、かつて、かなり長期間、高等学校側では選抜試験を行わず、中学校におけるアチーブメント・テストの成績、内申書などで入学者を決定してきた。

なお、中学校におけるアチーブメント・テストには、長い間、「英語」が除外されていた。

この2つのことが、中学校生徒の英語学力に大きな影響を及ぼしていたと考えられる。すなわち、アチーブメント・テストや高等学校入学試験にない科目へのモチベーションが低く、特に、中学校3年の後半において試験の準備に集中するとき、英語学力が伸びる可能性をもちながらも、その制度のゆえに、十分伸びていなかったのではないかと考えられる。

ところが、昭和34年度から形だけではあるが、アチーブメント・テストに英語が加えられることになった。ただし、この年度には実施されはしたが、英語は他の科目ときりはなして行なわれ、また、高等学校進学の際、選抜の資料とされないという条件がついていた。1年後の昭和35年度においては、アチーブメント・テストの中に正式に英語が加えられたのみならず、そのうえ、高等学校入学選抜のためには、神奈川県としては初めての高等学校側における学力検査を行ない、その中に英語も加えられたのである。

これまでは中学校で学習していたとはいえ、アチーブメント・テストの中に加えられず、そのうえ、高等学校入学試験になかった英語が、ともに試験科目に加えられたという制度上のこの一大変化は、学習意欲を高め、生徒の英語学力に大きな影響を与えずにはおかぬことが十分察せられる。この制度上の変化により、中学校卒業生の英語学力がどのように変動するか、これは当然評価し

なければならない問題である。それも、ただ学力が上昇したというような単純なことだけではなく、学力の変動をさまざまな角度から検討しなくてはならない。

そこで筆者は、この時期を選んで、試験制度の変化による中学校卒業生の英語学力の変動を、2年間にわたって検討しようとしたのである。

II 対象・方法・期間

調査対象

対象は、神奈川県下の公立中学校の3年生で、昭和34年度は1,144名、昭和35年度は1,045名である。対象校は“Standard Jack and Betty”を教科書として使用している学校の中から*、次の条件を満たすもの9校を選んだ**。

- (1) 公立高校に進学する生徒が多い学校、3校。
- (2) 進学する生徒は多いが、その中で公立高校と私立高校への進学者がほぼ同じ割合をしめしている学校3校。
- (3) 就職する生徒が多い学校、3校。

ただし、第2年目の調査に際し、資料に不備な点が多かったF校は集計から除外した。その結果、上記の3つのカテゴリーに入る学校は次のようになった。

- (1) A校, B校
- (2) C校, D校, E校
- (3) G校, H校, I校

対象校の被験者数は Table 1 のとおりである。

* 条件をいちおう統一するため、同一の教科書を使用している学校を選ぶようにしたが、さらに、後述するように、調査問題そのものが上記のリーダーをもとにしてつくられている。

** 昭和34年度にこの調査を実施することが決定してから、実際にテストを行なうまでの期間が短かつたので(中学3年生の卒業間際であつたので)、いろいろな条件を厳密に調査したうえで学校を選択することができなかつた。そのため、上記の条件にかなう学校の選択は、神奈川県教育委員会の鈴木忠夫指導課長(当時)の指示にしたがつた。

* A study of the effect of the entrance examination on the English performance of junior high school students.

** by Shin-ichi Jimbo (Meiji Gakuin University)

Table 1 学校別被験者数

昭和34年度				昭和35年度			
	男	女	計		男	女	計
A校	64	78	142	A校	72	70	142
B校	82	66	148	B校	73	66	139
C校	58	72	130	C校	67	68	135
D校	58	63	121	D校	76	45	121
E校	59	62	121	E校	74	63	137
F校	65	70	135	G校	66	50	116
G校	76	59	135	H校	81	68	149
H校	67	52	119	I校	59	47	106
I校	43	50	93				
合計	572	572	1,144	合計	568	477	1,045

上記対象校の生徒の卒業後の進学、就職等の実情を昭和35年度についてのみ示すと、Table 2 のようである。

Table 2 卒業後の進学・就職の状況一覧(%)

昭和35年度				
	公立校	私立校	就職	その他
A校	63.37	18.30	15.49	2.96
B校	65.13	13.69	16.66	6.51
C校	39.24	30.37	24.12	5.18
D校	28.09	40.49	29.98	1.66
E校	41.60	18.24	26.13	13.85
G校	13.28	33.23	44.82	6.04
H校	26.74	34.88	37.58	7.37
I校	25.49	11.30	61.32	2.83

調査の時期

このテストは、昭和35年2月、および昭和36年2月、各中学校の英語科の授業時間に実施した。

調査方法

筆者らが東京大学教育学部附属中学・高等学校の英語科教官4人と共同で、以前に作成してあった「英単語能力テスト」を用いた*。後で述べる調査結果の理解に必要なので、このテストについては若干詳しく説明する。

このテストは、次のような配慮から作成されている。

(1) 単語は2種類の教科書(Standard Jack and Betty, New Tsuda Reader)のうち1, 2, 3年の各学年共通のものから、その重要度の高いものから選択した**。

(2) 各学年の単語は、すべて名詞、動詞、形容詞に限り、各品詞12語ずつ、合計36語を使用した。

(3) テストは次に示すような2つの形式からなり、各学年のそれぞれの形式とも、単独単語18問、文中単語18

問からなる。

この例が示しているように、A形式で単独単語としてテストされるもの(このサンプルではdark)が、B形式では文中で示されている。A形式のテストを受ける者は

(例) A形式

単独 dark

文中 The weather was fine yesterday.

The weather will be rainy tomorrow.

B形式

単独 weather

文中 In winter it is dark after 5 o'clock.

You must not write in the dark room.

darkについてはこれだけを見て訳をつけるが、weatherについては、weatherの入っているこの文を手掛りとして訳をかくのである。B形式のテストを受ける者は、これと逆の関係になる。そして、全被験者のうち、半数がA形式のテストを、残りの半数がB形式のテストを受けるように配慮した。結果をまとめるときは、A形式、B形式を合わせて検討してある。

(4) このテストで使用した単語は、訳を書かせる単語のみならず、文章を作るのに用いた単語も、必ずすでに学校で用いている教科書に出ている単語から選ぶようにした。すなわち、既習の単語について、単独の場合と文中の場合とでテストを行なったことになる。

(5) 単語を単独でテストするとき、訳をつけにくい単語は除くようにした。テストをいわゆるコンテンツ・ワード(content word)といわれる単語のうち、名詞動詞、形容詞に限つたのはこのためである。

これまで説明したテストは、中学1年生用から高校1・2年生用まで作成されており、このテストを用いた研究はすでに公開してある*。そのなかで、A形式とB形式とは等質であることが明らかにされているので、結果の分析にあたっては、形式別に論ずることにしない。また、単語の理解は、中学3年から文脈の助けが飛躍的に増大することが明らかにされている。

次に、今回使用したテストの妥当性について説明する。

生徒の英語学力を評価するのに、いろいろなテスト形式が用いられているが**、筆者らが以前に英語科の学業不振児の研究を行なったとき、所要時間が2時間にわた

* このテストに関する詳しい研究は、沢田慶輔ほか(1960)を参照されたい。

** Faucett, L. & I. Maki (1952), 稲村松雄・鳥居次好(1956)が、その基準として用いられた。

* これについては沢田慶輔ほか(1960)を参照されたい。

** 英語科の評価の問題については、神保信一(1961)を参照されたい。

るかなり詳細なテストを作成して、学力を角面的に分析するのを試みたことがある*。そのときの被験者は中学校2年生であつたが、同一の生徒たちの追跡研究をして、そのときのテストのうちで、どの下位検査が後の英語学力と相関が高いかを検討した。下位検査は、単語・内容理解・訳・作文・文法・文字と発音・ヒヤリングであつた。その結果、中学2年のときに実施したテストの下位検査のうち、「単語」と「訳」の下位検査が、3年後の高等学校2年のときの英語学力（学校における評価）とともに0.64の相関を示し、後の生徒の学力とかなり高い相関があることが明らかにされた**。

さらに、筆者が今回の調査に用いたテストは、中学3年の英語成績と0.80の相関をもち、2年後の高等学校2年の成績とも0.65の相関を示すという結果が得られた***。

したがって、このテストは英語の学力を評価するうえで妥当性の高いものであるといえる。

さて今回は、このテストの他には、資料として各学校よりテストを受けた生徒の3年3学期の英語成績と、それらの生徒たちが卒業後どの方向に進んだかについての報告を求めた。これらの資料により、各学校ごとの被験者を上、中、下位群別に分け、また、卒業後のコース別に分類して分析した。

なお、使用した単語****は、Table 3のとおりである（問題は省略）

Ⅲ 結果と考察

1. テスト全般に関する分析

すでに「方法」のところで述べておいたように、同一のテストを、中学校3年生に対し卒業直前、同一学校において2年連続して行なつていたので、2年間の差を検討することにより、学力の変動をみていくことにする。

(1) 学校全体

昭和35年度（英語が正式の試験科目に加えられた年度）に学力の上昇が有意であつたのは、C校、H校、I校の3校であつたが、これからその特徴に一定の方向を見出すことはできない。（表省略）

* このときの研究については、沢田慶輔ほか(1960)を参照されたい。

** このときの詳しい検討は沢田慶輔ほか(1961)になされている。

*** これに関する検討も沢田慶輔ほか(1961)にある。なお、英語学力分析テストの中の「単語」と、英単語能力テストとの相関は0.84である。

**** このテスト全般の単語の構成については、沢田慶輔ほか(1960)に一覧表がある。

Table 3 使用単語表

学年 品詞	1 年	2 年	3 年
名 詞	chair house son	air library weather	baggage effort entrance museum temperature traveler
動 詞	know live wash	introduce remember send	belong contain explain melt reach spend
形 容 詞	good long young	careful comfortable poor	foreign important national rough sick smooth

(2) 上位群

学校における英語の成績が5段階評定で5、4の者を上位群、3の者を中位群、2、1の者を下位群として、この群別に検討する。

Table 4 は上位群のみを抜き出した結果である。学力の上昇を示しているのは、A、B、C、Dの4校である*。これらの学校はいずれも単独単語の面では学力の上昇が著しいのにもかかわらず、文中単語の面ではそれほどの上昇がみられない。しかし、上記の4校の中3校までが、文中単語と単独単語の得点の差が有意であるので、これらの学校の上位群の生徒は、文章の理解力がいちおうあるものといえよう**。なお、表として掲げるのは省略したが、アチーブメント・テスト(50点満点)において、上位群が45点以上のところは、上記のA、B、C、Dの4校であつた。この上位群の中で、学力の上昇をみたのは、だいたいにおいて高校への進学者の多い学校であり、学力の変動のなかつたのは就職する生徒が多い学校である。このことからみて、試験制度の影響は、高校へ進学する者が多い学校の上位群の生徒たちに明らかにあらわれたといえる。

* 紙面の関係で表を省略したが、この4校は県下のアチーブメント・テストで評点が高い学校である。

** この点についてのくわしい説明は、沢田慶輔ほか(1960)になされている。

Table 4 学業成績上位群における学力変動の結果(テスト全般)*

	人 数		(I) 単 独 単 語			(II) 文 中 単 語			(I+II) 合 計			(II-I)	
			18点満点		正答率	18点満点		正答率	36点満点		正答率	平 均 の 差	
			平 均	S. D.		平 均	S. D.		平 均	S. D.			
A校	45 52	前後 差	10.42	3.21	57.89	12.48	3.45	69.33	22.90	6.73	63.61	2.06	**
			11.85	2.92	65.83	13.57	2.42	75.39	25.42	4.62	70.61	1.72	**
			1.43	*	7.94	1.09		6.06	2.52	*	7.00		
B校	49 44	前後 差	12.98	2.72	72.11	15.06	1.96	83.67	28.04	4.07	77.89	2.08	**
			14.32	1.76	79.56	15.30	2.01	85.00	29.62	2.95	82.28	0.98	*
			1.34	**	7.45	0.24		1.33	1.58	*	4.39		
C校	44 48	前後 差	10.55	2.89	58.61	12.91	2.74	71.72	23.46	4.83	65.17	2.36	**
			12.92	2.47	71.78	14.31	2.07	79.50	27.23	3.92	75.64	1.39	**
			2.37	***	13.17	1.40		7.78	3.77	***	10.47		
D校	40 35	前後 差	7.80	2.91	43.33	12.23	2.59	67.94	22.03	4.90	61.19	4.20	**
			11.77	2.30	65.30	12.83	2.35	71.28	24.60	4.41	68.33	1.06	
			3.97	***	22.06	0.60		3.34	2.57	*	7.14		
E校	39 50	前後 差	8.54	3.10	47.44	10.10	3.93	56.11	18.64	6.68	52.78	1.56	
			8.10	3.36	45.00	9.16	3.99	50.89	17.26	6.82	47.94	1.06	
			-0.44		-2.44	-0.94		-5.22	-1.48		-4.84		
G校	41 42	前後 差	9.27	2.92	51.50	10.88	3.56	60.44	20.15	6.06	55.97	1.61	*
			8.60	3.63	47.78	10.05	4.09	55.83	18.65	7.29	51.81	1.45	
			-0.67		-3.72	-0.83		-4.61	-1.50		-4.16		
H校	40 46	前後 差	10.95	2.78	60.83	12.23	3.44	67.94	23.18	5.49	64.39	1.28	
			10.48	2.48	58.22	12.24	2.74	68.00	22.72	5.31	63.11	1.76	**
			-0.47		-2.61	0.01		0.06	-0.46		-1.28		
I校	35 40	前後 差	7.57	2.91	42.01	8.63	4.03	47.94	16.20	6.60	45.00	1.06	
			8.82	3.37	49.00	9.98	3.98	55.44	18.80	6.88	52.22	1.16	
			1.25		6.99	1.35		7.50	2.60		7.22		

* Table の中で<前>とあるのは昭和35年2月に実施したテスト結果であり、<後>とあるのは、昭和36年2月に実施した折の結果である。以下の表もこれと同様である。

(3) 中位群

中位群においては、学力が上昇したのはB, C, D, H校, 学力に変動がないのはE, I校, 学力が下降したのは, A, G校である。8校の中4校が学力の上昇をみているので、中位群の生徒達にも試験制度が学力に影響を及ぼすものとみられる。しかし、学力が下降したところが2校あることも注目しなければならず、筆者の調査したかぎりではその要因をつきとめることはできない。

(表省略)

(4) 下位群

表は省略するが、学力が上昇したもの——C, H, I校, 学力に変動がないもの——D, E, G校, 学力が下降したもの——A, B校の3群にわけることができる。学力の上昇をみた3校のうち, H, Iの両校は進学する者が30~40%であり、上位群では学力の上昇がみられなかつたにもかかわらず、下位群においては100点満点に直して10点以上の上昇をみている。このことからみるな

らば、英語学力の評価で、1または2の下位群の生徒達でさえ、さらに学力が伸びる可能性をもっていたといえよう。他方、進学する者が多く、全体として学力の高いA, B両校において、下位群では学力の下降がみられたことも注目すべきことであろう。

(5) 進学・就職の進路別

これまでの結果の検討は、学校を単位として比較してきた。しかし、ここでは学校単位ではなく、生徒が中学校を卒業後、どの方向に進んだかという進路別による分析を行なった。生徒の卒業後の進路はTable 5のように8種類に分類した。なお、進路別の資料は、テストを受けた生徒ひとりひとりにつき、卒業後、どの方向に進んだかを、担任の先生方から報告していただいたものである。

Table 5によると、学力の上昇をみたのが、公立高校(普通科)、私立高校(普通科)、各種学校へ進学した者、および就職した者であり、変化のなかつたのが、公立高

Table 5 進路別にみた学力変動の結果 (テスト全般)

		人 数	(I) 単 独 単 語			(II) 文 中 単 語			(I + II)			(II - I)
			平 均	S. D.	正答率	平 均	S. D.	正答率	平 均	S. D.	正答率	平均の差
公立高校 (普通)	前後差	362 325	9.25 10.48 1.23	3.72 3.79 ***	51.39 58.22 6.83	11.99 11.57 - 0.42	3.91 4.05	66.61 64.27 - 2.34	21.24 22.05 0.81	7.13 7.46	59.00 61.25 2.25	2.44 ** 1.09 ***
	前後差	58 73	9.37 9.81 0.44	3.02 3.86	52.11 54.50 2.39	11.09 11.60 0.51	3.73 4.07	61.61 64.44 2.83	20.47 20.81 0.34	6.36 7.05	56.86 57.80 0.92	1.71 ** 1.19 *
	前後差	196 160	5.18 7.14 1.96	3.76 4.47 ***	28.78 39.66 10.88	5.67 7.51 1.84	4.06 4.63 ***	31.50 41.72 10.22	10.85 14.65 3.80	7.63 8.26 ***	30.14 40.69 10.55	0.49 0.37
私立高校 (職業)	前後差	90 102	5.58 6.25 0.67	3.62 3.46	31.06 34.72 3.66	6.16 6.61 0.45	3.90 4.23	34.22 36.72 2.50	11.75 12.86 1.11	7.43 7.26	32.64 35.72 3.08	0.57 0.36
	前後差	27 10	3.52 6.06 2.54	2.85 3.55 *	19.56 33.72 14.16	3.74 6.25 2.51	3.55 3.76 *	20.78 36.72 15.94	7.26 12.31 5.05	6.24 6.87 *	20.17 34.19 14.02	0.22 0.19
	前後差	355 322	3.56 5.27 1.71	3.68 4.03 ***	19.78 29.27 9.49	3.60 4.92 1.32	3.96 4.35 ***	20.00 27.33 7.33	7.12 10.19 3.07	7.29 8.12 ***	19.78 22.75 2.97	0.04 - 0.35
就 職	前後差	27 28	2.71 3.30 0.59	2.88 3.38	15.06 18.33 3.26	2.30 4.86 2.56	3.49 12.65	12.78 27.55 14.77	5.01 8.16 3.15	6.09 7.38	27.83 22.66 - 5.17	- 0.41 1.56
	前後差	29 24	6.14 6.75 0.61	3.98 5.45	34.11 37.50 3.39	6.02 5.17 - 0.85	3.99 4.79	33.50 28.66 - 4.84	12.17 11.92 - 0.25	7.58 7.77	33.81 33.11 - 0.70	- 0.11 - 1.58
	前後差	29 24	6.14 6.75 0.61	3.98 5.45	34.11 37.50 3.39	6.02 5.17 - 0.85	3.99 4.79	33.50 28.66 - 4.84	12.17 11.92 - 0.25	7.58 7.77	33.81 33.11 - 0.70	- 0.11 - 1.58

校(職業科), 私立高校(職業科), 定時制高校へ進学した者, および家庭に入つた者である。

さらに学力の上昇をみた進路群の中で, 人数の多い公立高校(普通科), 私立高校(普通科), 就職の各コースの単独単語についてみると, 正答率の上昇の多いのは, 私高(普)(10.88%), 就職(9.49%), 公高(普)(6.83%)で, 私立高校(普通科)進学者が一番大きい。しかし成績そのものはけつして高くはなく, 正答率が50%以上であるのは, 公立高校(普通科), 公立高校(職業科)への進学者である。

他方, この Table 5 を横にみていくならば, 文中単語の成績が単独単語の成績より有意差をもつてすぐれているのは[表の(II - I)ののところ], 公立高校(普通科)進学者と公立高校(職業科)進学者のみである。換言すれば, この2群は文章の読解力がかかなりあるといことができる。したがって, 学力が上昇したと認めることができた公立高校(普通科)進学者群と私立高校(普通科)進学者群において, 前者はいちおう文章の読解力があつて学力も上昇しているが, 後者は学力が上昇したとはいへ(10.88%), 文章の読解力は不十分なままということが

できよう。このように, 学力が上昇したといつても, その内容は質的には同じものではないのである。

2. 単語群による分析

これまではテスト全般について考察してきたが, さらに焦点をしばり, 英語学力の上昇はどこにみられたのか, つまづきはどこにあるのかを検討する。

すでに調査方法のところでも触れてあるように, このテストは, 1年で学習した単語9, 2年で学習した単語9, 3年で学習した単語18, 合計36の重要単語からなっている。そこで, 各学年の単語群ごとに2年間の比較検討をすると次のようになる。

(1) 学校全体

全般的な単語群の正答率を示したのが Table 6 である。これによると, 3年の単語群の正答率が著しく上昇しているのが, 共通した特徴である。それも, 進学する者が多い少ないにかかわらず, どの学校においても上昇している。このことからみて, 生徒たちが3年になつてから, 英語に以前より力を入れてるようになったのではないかと推察される。なぜならば, 第2年目に調査の対象とした中学3年生は, 中学2年の12月に公立高校入試

Table 6 全般的な傾向（学年単語に関して）
正答率（％）

		1年単語	2年単語	3年単語
A 校	前後	66.28	49.61	31.03
	差	73.78	51.35	50.93
		7.50	1.74	19.90
B 校	前後	87.61	64.49	29.50
	差	84.71	58.77	86.46
		- 2.90	- 5.72	56.96
C 校	前後	65.47	36.84	22.05
	差	72.01	52.96	68.47
		6.54	16.12	46.42
D 校	前後	70.34	40.86	21.63
	差	73.27	41.96	62.34
		2.93	1.10	40.71
E 校	前後	55.28	24.56	15.93
	差	53.12	20.88	36.30
		- 2.16	- 3.68	20.37
G 校	前後	47.49	23.95	19.84
	差	43.48	24.76	28.53
		- 4.01	0.81	8.69
H 校	前後	54.81	29.79	24.28
	差	69.13	39.29	15.15
		14.32	9.50	26.87
I 校	前後	56.15	29.87	12.25
	差	65.40	30.71	46.18
		9.25	0.84	33.93

に英語も入ることがようやく決定をみた生徒たちである。したがって、このようなことがあつてから、英語の学習に力を入れ出したと考えられるわけである。

学力の上昇が著しいとはいっても、正答率が50%以下のものが3校あり、さらに2年の単語群においては、正答率50%以下のところが5校もあり、E校、G校は20%台にすぎないという事実は、英語学力の基本的な点で欠けるところが著しいといえる。すなわち、生徒の英語学力の成長は、2年のところでかなり頓座しているといえる。

(2) 上位群

3年の単語群について学力の上昇をみたのは、5校（A、B、C、D、I）であり、2年の単語群については学力の上昇をみたのは、2校（A、C）である（表省略）。このことからみて、上位群の生徒の英語学力に影響がみられたのは、公立・私立をあわせて高校への進学者の多いA、B、C、Dの4校（I校を例外として）とみることができよう。

(3) 中位群

明らかな傾向はないが、全体的には、進学者の多い学校よりも、むしろ就職者の多い学校に学力の上昇がみられた（表省略）。

Table 7 下位群について（学年単語に関して）
正答率（％）

		1年の単語	2年の単語	3年の単語
A 校	前後	41.32	18.06	14.58
	差	33.63	22.82	14.25
		- 7.69	4.76	- 0.33
B 校	前後	65.34	27.78	14.29
	差	52.54	17.41	37.23
		- 12.80	- 10.37	22.94
C 校	前後	19.44	3.13	3.13
	差	43.54	24.62	40.54
		24.10	21.49	37.41
D 校	前後	35.29	12.09	6.37
	差	43.10	53.85	11.58
		7.81	41.76	5.21
E 校	前後	44.12	12.75	7.19
	差	21.47	6.77	50.44
		- 22.65	- 5.98	43.25
G 校	前後	15.38	5.13	5.56
	差	14.56	9.42	31.76
		- 0.82	4.29	26.20
H 校	前後	10.80	3.09	3.55
	差	35.87	15.24	10.75
		25.07	12.15	7.20
I 校	前後	21.72	6.06	5.56
	差	35.49	12.96	40.51
		13.77	6.90	34.95

(4) 下位群

Table 7によれば、A校を除いて3年の単語群について5.21～43.25%の上昇を示している。このことからみて、英語の成績が1または2の下位群の生徒でも、学力が伸びるかなりの可能性をもちながらも、学力が十分伸びていなかったということになる。しかし、その正答率はけつして高いものではなく、全般的に学力の高いB校でも37.23%を示すにすぎない。また、3年の単語群において50.44%を示すE校が、2年の単語群については6.77%の正答率を、1年の単語群については21.47%と著しいアンバランスを示している。このようなアンバランスは、E校の他に、B、C、G、Iの各校が同じ傾向を示している。昭和34年度（Tableの中では〈前〉）の結果には、3年の単語群の正答率が2年の単語群の正答率より高いというアンバランスはみられなかったことと、上述のアンバランスとからみて、昭和35年度においては、いかに3年になつて、すなわち試験制度の変更後、英語の学習に前より力を入れたかが明らかである。

1年の単語群についてみると、正答率が50%以上であるのはB校のみであるから、中学3年をこの程度の学力で卒業していることになる。

Table 8 卒業後の進路別について
(学年単語に関して) 正答率 (%)

		1年の単語	2年の単語	3年の単語
公立高校 (普通)	前後	88.55	59.76	38.08
	差	66.21 - 22.34	65.58 5.82	36.41 - 1.67
公立高校 (職業)	前後	87.74	61.88	39.75
	差	89.01 1.27	57.68 - 4.20	41.75 2.00
私立高校 (普通)	前後	60.71	27.21	16.50
	差	65.79 5.08	38.87 11.66	16.48 - 0.02
私立高校 (職業)	前後	59.75	28.02	20.19
	差	59.57 - 0.18	32.52 4.50	21.88 1.69
各種学校	前後	47.74	15.23	9.26
	差	62.50 14.76	27.78 12.55	24.82 15.56
就 職	前後	39.53	36.18	9.61
	差	28.00 - 11.53	23.64 - 11.54	17.56 7.95
家事見習	前後	33.33	10.70	6.58
	差	48.51 15.18	16.29 5.59	12.22 5.64
定 時 高 校	前後	67.05	29.12	19.92
	差	50.86 - 16.19	26.85 - 2.27	15.60 - 4.32

(5) 進学・就職の進路別

これまで検討してきた各群別のものを、卒業後の進路別に集計しなおしたのが Table 8 である。これによると、進学する者で学力の上昇がみられるのは2年の単語群についてであり、進学しない者については、3年の単語群において学力の上昇がみられるのがその特長である。

1年の単語群についてみると、就職群と家事見習い群は正答率50%以下を示し、1年のところで学力の進歩がかなり頓座していることが明らかである。

2年の単語群についてみると、公立高校への進学者群は60%前後の正答率を示しているが、私立高校への進学者群は30%台の正答率である。このことからみて、上級学校へ進学する生徒のうち、中学校の英語をかなり理解しているのは、この調査からみれば、中学2年の程度であり、それも公立高校への進学者のみである。

3年の単語群についてみると、公立高校への進学者でも41%以下で、大部分は20%台、10%台にとどまっている。このことは、現在の3年における英語教育のあり方に問題を提起するものと考えられる。

なお、以上のほかに、品詞別による分析、個々の単語

についての分析もなされているが、紙面の都合でこれらは省略する。

3 調査対象校の英語科教員との面接調査結果

これまで筆者が2年間にわたって実施したテストを種々の角度から分析し、その結果について考察を加えてきた。しかし、このような調査は、このほかにもいろいろな調査を併せて行なうことが望ましいが、種々の事情からそれが不可能であつた。そこで、試験制度の変更とそれに伴う影響などを中学校側がどのように受けとめているかを確かめるために、筆者が昭和36年6月から7月にかけて(2回目の調査は昭和36年2月実施)、調査対象校を訪問し、英語科の主任(不在の折は調査実施担当教員)に面接し、次の諸点につき意見を求めた。

- (1) アチーブメント・テストの科目、および高校入試の科目に英語が加えられたことをどう思うか。
- (2) 上記の変化が生徒にどのような影響を及ぼすか。
- (3) 上記の変化に伴って、授業にどのような影響があるか。
- (4) その他。

なお、これらの点について回答を求めた後、筆者の調査意図(すなわち、同一問題により2年間の学力の変化をみようとしたこと)がわかっていたかどうかをたずねたが、筆者が説明するまで、その意図が全くわかっていなかったことが確認された。

この面接調査において全体を通じていえることは、次のようである。

第1に、アチーブメント・テスト、および高校入試に英語科が加えられた点は全部賛成している。それもただ賛成というだけではなく、英語科の教員としては入れるべきだと主張してきているのだから、おそすぎたという意見である。ただし、中学校側としては、高校入試の際テスト成績のみを重視するようになることを警戒し、出題内容、レベルなどについても非常な関心を示している。

第2に、生徒に及ぼす影響として、テストに英語があるとないとは相違がみられ、筆者が面接した昭和36年6月ごろの意見としては、3年の後半における学習態度に相違がみられることが強調された。ただし、A、B両校においては、変化はないだろうという意見が述べられた。

第3に、教師側の傾向としては、いちおう教科書をやり終るよう努めるとか、ドリル、テストを以前よりよいにするなどがみられるが、特に変わらないところもあり一定の傾向はみられない。

Ⅳ 要 約

筆者は複雑に構成された特殊な英単語テストを用いて昭和35年2月、および昭和36年2月の2回にわたり、神奈川県下の公立中学校3年生の卒業直前における英語学力を調査し、その実態を分析した。

全体としてみた場合には、学力の上昇をみたものは3校で、明らかな一定の方向を見出すことはできない。しかし、学校の中をさらに分割して上位群のみで2年間の比較をすると、県下のアチーブメント・テストで評点の高いA, B, C, Dの4校に学力の上昇がみられた。また、これらの学校は進学者の多いという面でも共通した点であり、これらの学校の上位群は1つの学校を除いて、文章の読解力も高まったことが明らかにされた。

中位群については、4校が学力の上昇をみ、2校に変化がなく、2校は下降している。学力の上昇をみた4校は進学者が多い学校である。(1校は就職者も多いが進学者も多い)

下位群では、学力の上昇が3校、不変が3校、下降が2校で、必ずしも一定の傾向はない。

卒業後の進路別に分析しなおしてみると、学力の上昇をみたのが、公立高校(普通科、職業科)、私立高校(普通科、職業科)、就職、各種学校の進路をとつたものである。これらのうちで私立高校へ進学した群は学力の上昇は著しいが、文章の読解力について学力の上昇をみたのは、公立高校へ進学した者のみであつた。

いろいろな面から分析してみたが、学力の上昇のしかたや中学校卒業後の進路などによるちがいはあるにしても、試験科目の中に英語が加えられるようになってから、中学校卒業生の英語学力が上昇したことが明らかにされた。しかし、その学力の上昇の内容は複雑で、3年で学習したものについては上昇が著しく、2年で学習したものについては上昇の度合いが一番少ないというアンバランスをみせている。しかも、3年における学習内容についての理解十分とはけつしていえるものではなく、今後の綿密なカリキュラムにもとづく指導と評価の積み重ねが望まれると考えられる。

以上の結論は、次の2点を前提として導き出されたものである。第1は、ここで用いられた英単語テストが英語学力評価の指標として妥当であること、第2は、調査の対象となつた昭和34年度の3年生と昭和35年度の3年生は、能力的にみて同程度の集団であることである。

第1の点については、前述のようにこれを支持する資料があるが、ここで用いたテストだけで英語学力全般を評価するのにけつして十分であつたとは考えていない。

第2の点については、調査対象の生徒数がかなり多いところからみて、無理のない前提といつてよいであろう。

この調査は教育制度の変革に伴う学力の変動を明らかにしたが、制度的変化が学習指導や、生徒の学習態度に及ぼした影響とそれらの条件と英語学力の変化との関係を分析することはできなかった。したがつて、生徒の学力を左右した直接の要因についてくわしく考察することはできなかった。また、このような制度的変化が、英語以外の教科の学力と、その他に与えた影響も考察する資料をもたない。

これらの不備はいろいろあるにしても、教育制度的変革の一時点において、学力の推移を客観的に記録した資料として残されるべきものと考えられる。

文 献

Faucett, L. & I. Maki 1952 A study of English word-values statistically determined from the latest extensive word-counts. Shinozaki Shosin.

橋本重治 1959 教育評価法総説. 金子書房. とくに 51~73.

波多野誼余夫 1960 高校入学選抜法に関する一考察. 教育心理学研究, 8, 69~73.

稲村松雄・鳥居次好 1956 必修語いの研究. 開隆堂.

神保信一 1961 外国語(英語)科の評価と記入法 沢田慶輔(編)新指導要録の解説と評価・記入法. 新光閣, 113~123.

神保信一 1962 英語学力の分析的研究——神奈川県公立高校の場合——. 明治学院論叢, 74, 69~93.

増田幸一・ほか 1961 入学試験制度史研究. 東洋館.

岡部弥太郎 1928 入学試験に関する調査. 教育思潮研究, 2の1, 55~176.

沢田慶輔・肥田野直・神保信一・ほか 1959 英語科における学業不振児の研究. 教育心理学研究, 7, 96~107.

沢田慶輔・肥田野直・神保信一・ほか 1960 英単語の教育心理学的研究. 教育心理学研究, 8, 74~81.

沢田慶輔・肥田野直・神保信一・ほか 1961 英語の学習適性に関する研究. 教育心理学研究, 9, 28~33.

<追記>この研究を行なうにあたり、種々助言を賜り、原稿をご校閲くださった東京大学教育学部の沢田慶輔先生と肥田野直先生に厚くお礼を申し上げます。

<1963年12月23日原稿受付>

A study of the relation of the entrance examination to the
English performance of junior high school students.

by
Shin-ichi Jimbo
Meiji Gakuin University

The purpose of this study is to examine the relation of the prefecture-wide English achievement test and entrance examination to the performance of junior high school students.

In Kanagawa prefecture, since 1960, the third grade junior high school students have been required to take the prefecture-wide English achievement test and entrance examination which had not been administered until 1959.

To compare the English performance of the students in 1960 with the performance of the same grade students in 1959, an English test which had been constructed by the author and others was administered to 1,144 junior high school students on February, 1959 and to 1,045 students on Feb., 1960. (refer the Jap. J. of educ. Psychol., Vol. 8, No. 2

and Vol. 9, No. 1 for the English test.)

Average vocabulary score for high score students in junior high schools with a high percentage of applicants to senior high school increased significantly from the result in 1959 to that in 1960. Also same type of increment was observed in average comprehension score.

Average scores for middle score students in these 4 schools increased significantly from the results in 1959 to those in 1960.

No systematic change was found on the average scores of low score students in those 4 schools.

Average scores for 4 groups in grouped in terms of courses in public senior high schools, private senior high schools, other special schools and jobs showed a significant increment from 1959 to 1960.

A STUDY OF THE STABILITY OF CHILDREN'S
SOCIOMETRIC STATUS

An Analysis of the Stability of Choices Given to Others

by
Toshimi Ueda
Nara Gakugei University

The present study is an attempt to analyze, with special reference to test-retest intervals and to choice level, the stability of choices given by elementary school children in grades 2, 4 and 6.

Subjects were requested 1) to choose three class-

mates in an attempt to analyze the difference between test-retest intervals, and 2) to choose five classmates to analyze choice levels. The criterion of choice was with whom they most preferred to work in sweeping their classrooms and play ground.